

最近わが国内でも、自然保護運動が徐々にもりあがって来たことは慶賀に堪えない。その一方、美しい自然が心なき人々によって、とり返しのつかない荒廃を来たした例も少なくないのは、はなはだ遺憾である。およそ羨しき自然が出現するまでには少なくとも数十年、多くは数百年の年月を経ているから、ひとたび荒廃したらその復元はほとんど不可能である。その意味から自然の破壊は子孫に対する罪悪、換言すれば、人類の幸福を破壊する罪悪である。

近年の自然破壊の大きな原因は、観光ブームである。せつかく万人が楽しむために紹介され、行きやすくし、休息しやすくする、いわゆる観光開発は多くの場合自然の荒廃に終わっている。その一例として、北見の網走湖畔のミズバショウの大群落を保護するため天然記念物に仮指定したところ、自然界には予想もしなかった異変がおこった。まず、ミズバショウの群落は湿地にあるから、何人も行きやすくするために歩道を設けた。その花の開花時期には多くの人々が訪れ、盛んに美しい花を写真にとり楽しむようになった。

ところが、この湿地の近くの樹林に珍しくもアオサギのコロニー(集団営巣地)があつて、ミズバショウの咲く頃に百個近くの巣に各々卵を産んで親鳥が抱いている。その近くに写真機を持った人々が往来するために、親鳥が驚いて巣を離れる。それを待ち構えていた悪鳥のカラスが巣に殺到して孵化中の卵を盗みに入り、その場で食べたり、嘴にくわえて運び去ったりし

て、アオサギの大脅威となってきた。

アオサギの大コロニーは北海道でなくては見られないから、どこか適当なコロニーを天然記念物にしようとしていた矢先でこの網走湖畔のコロニーは有力な候補であつたが、思わぬ障害で資格が疑われるにいたつた。このように自然界の相関関係はきわめてデリケートで、故意に自然物を破壊しなくても、結果において破壊を招くことが少なくない。

まして、多少でも自然界に人為を加える場合は慎重な調査を必要とし、一方的観察でことを運ばばとり返しのつかないことになる。観光者の一人が心なく一本ずつ野草の花を摘みとつたとすれば、万人の観光者がくれば、その附近はたちまち砂漠のようになる。

わが国には国立公園、国定公園、都道府県の自然公園など狭い国土の割合に数多くあるが、さてその管理者はお話しにならないほど少なく、しかも自然物に対する知識の普及については何等配慮されていない状態で、これでは返つて公園にしたために荒廃を招く結果となる。公園にするからには、それ相当の経費を投じ、これを保護する策も講じなかつたら知らず知らずの間に破壊される。現状では仏作つて魂入れずのたぐいである。国民の休養の場とするには、高度の知識をもって保護をしなければならぬし、それ相應の施設をしたことを教養の場ともする必要がある。

(副会長)

自然界の相互関係

犬 飼 哲 夫

